「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿〈１１月９日（金）放送分〉

テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第８回目の，シリーズ「奄美歳時記」をお送りします。

「我が奄美大島に誇るべきものが一つある。それは哀切極まりなきその民謡である。奄美大島の民謡は啻にこの島の郷土芸術の誇りであるばかりでなく，概して我が日本の豊富なる郷土芸術の中でも最も特色的なものの一つである。それは奄美民謡が獨り芸術的に優れているばかりでなく，歴史的にも，民俗学的にも，言語学的にも，特殊の価値と興味とを有するからである。（後略）」

これは，文英吉の著書「奄美大島民謡大観」の序文において，ロシア文学者，昇曙夢が記したものです。

昇曙夢は，その後に「過去数年間異常な苦心と努力を捧げて，何等まとまった記録もなく，空しく散逸しつつある郷土民謡を各島に亘って広く蒐集したことは，単にそれだけでも全島民の感謝に値すべき有意義な事業である。」と述べ，それまで誰にも手を着けられなかった民謡風土誌における功績を高く評価しています。

また，昭和４１年出版の「奄美民謡大観　改訂版」にあたり，島尾敏雄は，「奄美群島はその歴史や民俗，言語，民謡に関して，学問の上でも文学の上でも珍重すべき宝庫のように感じているのに，それら各分野の研究成果の少ないことを残念に思っていた。文献は散いつして荒涼たるものだ。この荒地に鍬入れするものの困難は思いの外に違いない。私にはその数少ない孤独な開拓者の一人に文さんが見えた。」と記しています。

この「奄美民謡大観」は，文英吉が奄美大島の各島を自分で訪ね歩き，その土地の島唄や伝説を数多く集め，時には三味線を弾きながら歌い，自分の言葉で一つ一つ丁寧な解説を付けてまとめたものです。

その中から，「三味線の話」について紹介しましょう。

三味線は，今から５５０年位前に中国から琉球に伝わりました。そして，棹(さお)の長さを少し短くして，現在の形になりました。

琉球から奄美大島に伝わってきたときの記録はなく，はっきりわかりませんが，それから２００年位経ってからのことであろうと記されています。沖縄の三味線は蛇の皮を張っていましたが，奄美大島では，その当時，質のいい日本紙を芭蕉の切り株からしみ出る汁で張っていました。紙張りの三味線の音はよかったのですが，天気や風により音が変わるため，現在使われている蛇皮になったようです。

また，三味線は，魔除けの力があり，お祝いを招くものでもあると信じられていたため，奄美大島のほとんどの家庭に，三味線があったとも記されています。

文英吉は，この三味線について，「数千年の昔，メソポタミアあたりから埃及(エジプト)に印度(インド)に支那(シナ)に亘(わた)って琉球に入り，更にこの大島に伝わった三味線，而(しか)も未開人の武器の弓であったそれがこのごとき変遷と発達を経て，今大島の歌謡になくてならぬ理想的器楽となり島人の詩的，音楽的，情調をいやがうえにも高揚しつつあるその尊き存在」と述べています。

１０月に東京・両国国技館で行われた「民謡民舞全国大会」には，奄美から７名の方が出場し，入賞しています。芸術の秋です。 日常の生活の一部として存在している奄美民謡ですが，文英吉が述べているように，我が奄美大島に誇るべきものである奄美民謡を，歴史的，民俗学的，言語学的な価値から再認識し，そのよさを感じてみてはいかがでしょうか。

以上，県立奄美図書館でした。